

◆資料

高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさに関する文献検討

A Literature Review on the Personhood of Elderly People with Dementia as Perceived by Nurses in Elderly Care Facilities

西田 珠貴¹⁾, 藤田 冬子¹⁾

Nishida Juki, Fujita Fuyuko

抄 録

目的：高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさについての基礎資料を得る。

方法：医学中央雑誌 Web 版 (Ver.5) で、キーワードを「その人らしさ」「認知症」「ケア」「施設」とし、検索した。その結果、得られた 33 文献を精読し、日常のケアの中で認知症高齢者のその人らしさについて記述している 6 文献を対象とした。

結果：高齢者施設の看護師は、認知症高齢者のその人らしさを「生活者としての認知症高齢者のありのままの姿」「ケアを通して現れる認知症高齢者の姿」「施設という環境で暮らす認知症高齢者の姿」「人生の中で培われてきた認知症高齢者の姿」から捉えていた。また、認知症高齢者のその人らしさを大切にしたいケアには、「安心できる環境の調整」「自尊心を尊重したケア」「残存能力を引き出すケア」「からだを整えるケア」があった。

考察：高齢者施設の看護師は、認知症高齢者のその人らしさを認知症の症状に現れる人となりから、「認知症高齢者のありのままの姿」「ケアを通して現れる姿」「施設という環境で過ごす姿」「長い人生の中で培われてきた姿」も踏まえて捉えていることが推察される。そして、認知症高齢者が、その人らしくコンフォートな状態を保ちながら、施設で暮らし続けるためには、高齢者施設の看護師がおこなう「安心できる環境の調整」「自尊心を尊重したケア」「残存能力を引き出すケア」「からだを整えるケア」が重要である。

キーワード：その人らしさ、認知症、ケア、施設

Key words : personality, dementia, care, facility

I. はじめに

認知症高齢者は、認知機能の低下に加え加齢による身体機能の低下も影響し、要介護となると、住み慣れた自宅や治療先の病院から、施設に移転（以下、リロケーション）することが多い。

このようなリロケーションは、周囲の人や場所などの環境要因に影響を受けやすい認知症高齢者にとって重大な転機であり、興奮症状や精神症状を生じやすくする。しかし、認知症高齢者は施設に入所後は、自らの力に合わせ一定のステップを辿りながら施設の環境に適応しようとし（久米ら, 2013）、リロケーションダメージを超えていく。

認知症高齢者が、リロケーションダメージを軽減させていく力を促進するには、看護師が認知症高齢者の「自

分らしさ」や「その人らしさ」を尊重し、意思を適切に反映することが必要となる。そのためには、認知症高齢者の「自分らしさ」と他者である看護師が捉える認知症高齢者の「その人らしさ」が一致していることが望ましいと考える。このことにより、認知症高齢者は、施設に入所した早期から、精神的な心地よさや自分らしさを強く実感することができ、安心感、共感的理解による自己安定感、危険や危害のない環境にいることができるようになる（吉本ら, 2019）。

リロケーションダメージの緩和を図る看護師のケアでは、認知症高齢者の環境に適応しようとする力が促進されるよう、施設に入所した直後から新たな生活環境への円滑な移行を支援する必要性が指摘されている（小松, 2013, 渡邊, 2021）。しかし、このようなケアは、看護師の熟練度による違いが影響しており、日常ケアには活かされていない。

そこで、本研究は、高齢者施設の看護師が捉える認知

¹⁾ 神戸女子大学大学院

Kobe Women's University, Graduate School of Nursing

症高齢者のその人らしさについて、どのようなものがあるのか文献から抽出し基礎資料を得ることとした。

II. 目的

高齢者施設で働く看護師が認知症高齢者のその人らしさをどのように捉えているかと、そこで行われているケアについて文献レビューを行うことを目的とした。

III. 用語の定義

「認知症高齢者のその人らしさ」は、他者が認識する認知症高齢者の自然な状態や姿であり、看護師自身の価値観や看護観に基づき推察された認知症高齢者の性格、価値観、信念とする。(伊藤ら, 2005. 松尾, 2006. 小和田ら, 2012. 黒田ら, 2017.)

IV. 方法

1. 検索方法

医学中央雑誌 Web 版 (Ver.5) で、「その人らしさ」をキーワードとし、タイトルまたは抄録に含まれている文献で、原著論文を検索した。そして、「その人らしさ」「認知症」のキーワードで絞り込み、さらに、「その人らしさ」「認知症」「ケア」のキーワードをタイトルまたは抄録に含む原著論文を検索した。しかし、これらの文献には、基礎看護学実習に伴う看護学生の実践やアクティビティにおける認知症高齢者のその人らしさが含まれていた。そこで、継続的な日常のケアの中で、高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさに限局するため、看護学生の実践や一時的なアクティビティ等の文献を除外した。これらの文献に再度、キーワードを「その人らしさ」「認知症」「施設」とし、タイトルまたは抄録にキーワードを含む原著論文を検索した。本研究では、日本の社会・文化背景に沿った高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさを検討するため、和文献のみを検索対象とした。最終検索日は、2021年10月である。

2. 分析方法

「タイトル」「著者」「発行年」「掲載雑誌名」「研究デザイン」「結果」について要約した。次に、文献内に書かれている「高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさ」と「認知症高齢者のその人らしさを大切にされたケア」について内容を抽出し、看護師が、認知症者高齢者のその人らしさをどのように捉えているのか

を検討した。

V. 結果

1. 文献の概要

医学中央雑誌 Web 版 (Ver.5) より、「その人らしさ」に関する 252 文献を抽出した。さらに、「その人らしさ」「認知症」をキーワードに検索した結果、87 文献であった。そして、「その人らしさ」「認知症」のキーワードに「ケア」を加え検索した結果、65 文献を得た。最後に「その人らしさ」「認知症」のキーワードに「施設」を加え検索した結果、33 文献を得た。

抽出された文献から、看護職以外の職種や家族が研究対象になっている文献を除外し、日常のケアの中で認知症高齢者のその人らしさについて記述している 6 文献を対象とした。

次に、文献ごとに分類した内容を表にまとめ、年代の古いものからナンバーリングした (表 1)。年次ごとの文献数は、2008 年 2 件、2013 年 1 件、2017 年 1 件、2019 年 2 件であった。研究デザインは、質的研究が 5 件、量的研究が 1 件であった。

2. 高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさ

高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさは、「生活者としての認知症高齢者のありのままの姿」「ケアを通して現れる認知症高齢者の姿」「施設という環境で暮らす認知症高齢者の姿」「人生の中で培われてきた認知症高齢者の姿」の大きく 4 つに分類された (表 2)。

まず、1 つ目の「生活者としての認知症高齢者のありのままの姿」について、高齢者施設の看護師は、現在の認知症高齢者のその人らしさを、認知症による症状、認知症の症状に現れる人となり、素直な感情表現、身体症状、言動や反応、表情などから、ありのままの姿を捉えていた。

長岡ら (2013) は、認知症による症状に配慮し、言動を否定せずに、目の前の認知症高齢者を受け止めることから、その人らしさを捉えようとしていた。また、青柳ら (2017) は、人生の中で身についたものとして、認知症の症状に現れる人となりや、その人の真の部分である素の部分や本音、素直な感情表現からその人らしさを捉えていた。そして、原ら (2008) は、入居者の一見意味不明な言動や反応を問題行動と決めつけず、生活歴とか

表1 「認知症高齢者のその人らしさ」に関する文献の分類

文献番号	タイトル	・掲載誌 ・掲載年 ・著者名 ・研究デザイン	高齢者施設の看護師が捉える 認知症高齢者のその人らしさ	認知症高齢者のその人らしさを大切にケア
①	介護保険施設において熟練看護師が実践している認知症高齢者への看護ケアプロセスの特徴	・長畑多代, 他 ・2008年 ・神戸大学大学院保健学研究科紀要 ・因子探索型研究	・生活パターン ・リズム ・こだわり ・言動	・相手の状況に合わせた対応 ・ケアを受け入れてもらえる安心できる関係を構築 ・認知症という疾患の特徴や加齢による変化を踏まえて, からだを整える ・からだを整えることを通してその人らしさが発揮できるよう支援 ・言動を常に心身の健康状態と関連させ, 体調変化の兆しを早期に察知していた ・看護ケアを通して, 対象の言動の意味や固有の認知症の世界を理解し, ニーズに合うケアに発展させていた言動の理由や意図を探り, 自尊心を傷つけないアプローチ
②	ユニット型介護老人保健施設のケアスタッフが重要と考える認知症ケアの実践内容	・原祥子, 他 ・2008年 ・島根大学医学部紀要 ・質的研究	・言動や反応 ・意向や希望 ・行動 ・これまでの生活環境	・思いを汲み取る ・行動を尊重しその人らしさとして見守る ・「自分の居場所」として認識し, 落ち着いて過ごせる環境調整 ・暮らしについて希望を聞き入居者の意向を尊重する
③	介護老人保健施設における看護師の認知症高齢者ケア場面のとらえ方とケア行動の特徴	・長岡さとみ, 他 ・2013年 ・老年看護学 ・質的研究	・認知症による症状 ・強い思い ・言動 ・不安な思い ・表情や行動	・言動を否定することなく, 相手の身になって思いや言動を受け止める ・納得できるかかわり ・不安な思いに寄り添う ・落ち着き安心できるようにする ・表情や行動で示すことを知り, その意味を理解することを大切に個別の対応をする ・認知症高齢者のできる機能を発揮する機会をつくる ・その人が人としてよりよく生きていくことを支援する
④	看護職・介護職が認識する認知症高齢者のその人らしさ	・青柳 暁子, 他 ・2017年 ・山梨県立大学人間福祉学部紀要 ・質的研究	・生育歴, 生活歴 ・育った環境 ・その人だけの特質 ・持って生まれた性格 ・人間関係 ・身につけた社会性 ・歴史の中で培われてきた認識・判断・自己決定の蓄積 ・症状に現れるひととなり ・素直な感情表現	・認知症高齢者を生活者と捉える ・記憶を単に過去の情報とだけ認識するのではなく, 生活者としての歴史として理解する ・生活者個人の歴史の中で培われてきた認識・判断・自己決定の蓄積を他者からの視点で捉えたものをその人らしさと認識している
⑤	介護老人福祉施設の高齢者が感じる「自分らしさ」とケア職員が捉える「その人らしさ」	・秋本千佳, 他 ・2019年 ・日本看護医療学会雑誌 ・質的研究	・性格, 気質や他者との関わりで表れる特性 ・職員や家族に対する思い ・施設生活に対する思いや態度 ・その人の現存能力身体機能の程度, 意思表示の程度 ・施設における生活リズム, 納得できる暮らし方, 習慣 ・快樂, 個の過去の楽しみ, 個の日常的な楽しみ, 他者との日常的な楽しみ ・印象深い/価値ある過去の経験, 繰り返し語られる過去の出来事, 大切にしている形見 ・ケアを通して現れる言動	・ケアを実践する中で高齢者の言動から「その人らしさ」を見聞きし, 把握していた ・言動に着目し, 背景にある思いを汲み取る ・生活を支援するための医学的視点を持ち, 身体的側面を援助する ・今その人にとって最良の心身状態を維持する
⑥	グループホームにおける「その人らしさを尊重したケア」の実態調査	・中川孝子 ・2019年 ・弘前医学 ・量的研究	・身体症状 ・個々の生活機能や生活リズム ・引き出した内面 ・その時その時の思い ・生活歴 ・表情や目線等 ・できること ・あらゆる感情表出	・身体症状の把握と対応 ・居心地の良い環境形成 ・個々の生活機能や生活リズムに合わせる ・パーソナルスペースを大事にする ・決めつけず各々の見方の情報を共有する ・様々な刺激を与え内面を引き出す ・その時その時の思いを尊重する ・集団意識を持っていることを理解する ・生活歴を現在の生活に活かす努力をする ・表情や目線等から興味・関心事を追求する ・自己決定できる働きかけをする ・できることを発見し継続していく ・あらゆる感情表出からニーズを把握する ・コミュニケーションの手段を駆使する

かわりがないか観察と想像から、入居者のその人らしさを捉えていた。中川ら（2017）は、その人らしさを身体症状と表情や目線等から捉えていた。

2つ目の「ケアを通して現れる認知症高齢者の姿」について、高齢者施設の看護師は、ケアを通して現れた認知症高齢者の内面や言動、意向や希望、思いをくみ取り、その時その時の思い、不安、さらに、認知症高齢者ができることから、その人らしさを捉えていた。

秋本ら（2019）は、ケアを実践する中で高齢者の言動からその人らしさを見聞きし、中川ら（2019）は、引き出した内面やその時その時の思い、そして、強みへの働きかけとして、認知症高齢者ができることを発見し継続することからその人らしさを捉えていた。また、原ら（2008）は、汲み取ったその人の希望や思いから、その人らしさを捉えていた。長岡ら（2013）は、不安のため夜間にさまざまな行動をする認知症高齢者につき添い、不安な思いからもその人らしさを捉えようとしていた。

3つ目の「施設という環境で暮らす認知症高齢者の姿」について、高齢者施設の看護師は、施設という環境の中で、認知症高齢者の施設生活に対する思いや態度、生活パターンやリズム、こだわり、個々の生活の様子からその人らしさを捉えていた。

秋本ら（2019）は、施設生活に対する思いや態度、施設における生活リズムや快樂から、その人らしさを捉えていた。また、生活パターンやこだわり、個々の生活機能から、その人らしさを捉えていた（長畑ら、2008；中川ら、2019）。

4つ目の「人生の中で培われてきた認知症高齢者の姿」について、高齢者施設の看護師は、認知症高齢者の生育歴、生活歴、これまでの生活環境、その人だけの特質、持って生まれた性格、人間関係、身につけた社会性、歴史の中で培われてきた認識・判断・自己決定の蓄積、印象深い価値ある過去の経験から、認知症高齢者のその人らしさを捉えていた。

青柳ら（2017）は、生育歴、生活歴・育った環境・その人だけの特質・持って生まれた性格・人間関係・身につけた社会性・歴史の中で培われてきた認識・判断・自己決定の蓄積から、今までのその人らしさを捉えようとしていた。また、秋本ら（2019）は、認知症高齢者の性格や、これまでの印象深い、価値ある過去の経験からその人らしさを捉えようとしていた。そして、原ら（2008）は、入居者が毎日穏やかに落ち着いて過ごせるように、これまでの生活環境に焦点をあてていた。

以上の4つの分類から、高齢者施設の看護師は、認知

表2 高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさ

分類	高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさ（文献番号）
生活者としての認知症高齢者のありのままの姿	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症による症状（③） ・言動や反応（①，②，③） ・認知症による症状に現れるひととなり（④） ・素直な感情表現（④） ・身体症状（⑥） ・表情や目線等（⑥）
ケアをとおして現れる認知症高齢者の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・ケアを実践する中での言動（⑤） ・引き出した内面（⑥） ・その時その時の思い（⑥） ・できること（⑥） ・くみ取った希望や思い（②） ・不安な思い（③）
施設という環境で暮らす認知症高齢者の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・施設生活に対する思いや態度（⑤） ・施設における生活リズム（⑤，⑥） ・快樂（⑤） ・生活パターン（①） ・個々の生活機能（⑥）
人生の中で培われてきた認知症高齢者の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・生育歴、生活歴（④，⑥） ・育った環境（④） ・その人だけの特質（④） ・こだわり（①） ・持って生まれた性格（④，⑤） ・人間関係（④） ・身につけた社会性（④） ・歴史の中で培われてきた認識・判断・自己決定の蓄積（④） ・印象深い／価値ある過去の経験（⑤） ・これまでの生活環境（②）

症高齢者のその人らしさを現在の認知症による症状や生活の中での言動や反応、表情から捉えていた。そして、日常のケアを通して引き出された認知症高齢者の言動からくみ取った意向や希望、思いからその人らしさを捉えていた。さらに、長い人生の中で培われてきた個人の価値や生活習慣、ライフスタイルの積層による生活歴から、認知症高齢者のその人らしさを捉えていた。

3. 認知症高齢者のその人らしさを大切にされたケアについて

認知症高齢者のその人らしさを大切にされたケアは、「安心できる環境の調整」「自尊心を尊重したケア」「残存能力を引き出すケア」「からだを整えるケア」の大きく4つに分類された(表3)。

まず、1つ目として、「安心できる環境の調整」について、高齢者施設の看護師は、認知症高齢者が安心できる関係を構築し、不安な思いに寄り添っていた。そして、認知症高齢者が施設を自分の居場所として認識し、落ち着いて過ごせるように、パーソナルスペースの確保や居心地の良い環境調整を大事にしていた。

長畑ら(2008)は、相手の状況に合わせた対応によりケアを受け入れてもらえるように、安心できる関係を構築することを前提にしていた。そして、長岡ら(2008)は、不安な思いに寄り添い、日常生活における不安がなく安心して過ごせることが、認知症高齢者の心身の安定に欠かせないと述べていた。原ら(2008)は、認知症高齢者が「自分の居場所」として、認識できるプライベートな空間を確保することにより、落ち着いて過ごすことができ、このような環境を調整することが、その人らしい生活の維持を支援することになると述べていた。また、中川ら(2019)も、認知症高齢者の基本的な個を重視し、居心地の良い環境として、パーソナルスペースを大事にしていることを述べていた。

2つ目の「自尊心を尊重したケア」では、高齢者施設の看護師は、認知症高齢者を生活者と捉え、今までの生活習慣や生活スタイルを大切に、その時その時の思いや行動を尊重し、その人らしさとして見守っていた。また、行動の理由や意図を探り、言動を否定することなく、相手の身になって思いや言動を受け止めていた。そして、対象者のありのままの姿を大切に、自尊心を尊重したケアをおこなっていた。

長畑ら(2008)は、認知症高齢者の言動の理由や意図を探り、自尊心を傷つけないアプローチや受け入れても

らえる方法からその人らしさを支えていた。そして、長岡ら(2013)も、その人の意に沿った対応として、認知症高齢者の言動を否定することなく、相手の身になって思いや言動を受け止め、納得できるように支援していた。また、原ら(2008)は、入居者の行動を尊重しその人らしさとして見守ることは、その人らしい生活の維持を支援することになると述べていた。青柳ら(2017)は、認知症高齢者を生活者と捉え、生活者個人の歴史を理解し、他者からの視点で捉えたものをその人らしさと認識していると述べていた。

3つ目の「残存能力を探し引き出すケア」について、高齢者施設の看護師は、暮らしの中のケアを通して、認知症高齢者に様々な刺激を与え、内面を引き出し、認知症高齢者ができることを発見し、それらを発揮する機会を作っていた。また、暮らしの中で認知症高齢者が自己決定できるように、残存能力を探し引き出すケアをおこなっていた。

中川ら(2019)は、高齢者施設の暮らしの中で、様々な刺激を与え内面を引き出し、認知症高齢者の自己決定の機会やできることを発見し、継続していく支援を重視していた。また、長岡ら(2013)も、認知症高齢者のできる機能を発揮する機会をつくっていた。そして、原ら(2008)は、ケアを通して、認知症高齢者の言動の意味や固有の認知症の世界を理解し、ニーズに合うケアに発展させていた。

4つ目の「からだを整えるケア」について、高齢者施設の看護師は、認知症高齢者のその人らしさが発揮できるように医学的視点を持ち、認知症という疾患の特徴や加齢による変化と言動を常に心身の健康状態と関連させ、体調変化の兆しを早期に察知していた。そして、今その人にとって最良の心身状態を維持するというからだを整えるケアをおこなっていた。

中川ら(2019)は、基本的な個を重視とするケアとして、身体症状の把握と対応を述べていた。そして、長畑ら(2008)は、認知症という疾患の特徴や加齢による変化を踏まえるとともに、認知症高齢者の言動を常に心身の健康状態と関連させ、体調変化の兆しを早期に察知していた。また、秋本ら(2019)も、生活を支援するための医学的視点を持ち、身体的側面を援助することで、今その人にとって最良の心身状態を維持するケアをおこなっていた。

以上の4つの分類から、認知症高齢者のその人らしさを大切にされたケアでは、認知症高齢者が看護師と安心で

きる関係を構築し、施設を「自分の居場所」として認識することで、落ち着いて過ごせるように「安心できる環境の調整」をおこなっていた。そして、認知症高齢者を生活者と捉え、今までの生活習慣や生活スタイルを大切に、認知症高齢者の自然な状態や姿を尊重し、「自尊心を尊重したケア」をしていた。さらに、認知症高齢者が、納得のできる生活を自己決定できるように、「残存能力を探し引き出すケア」をし、その人らしさを発揮する機会を作ることをおこなっていた。

これらのケアとともに、高齢者施設の看護師は、医学的視点を持ち、認知症という疾患の特徴や加齢による変化と言動を常に心身の健康状態と関連させていた。そして、認知症高齢者の体調変化の兆しを早期に察知し、「からだを整えるケア」をおこなっていた。

VI. 考察

1. 高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさ

小和田ら(2012)は、対象者を他者が捉える表現が「その人らしさ」であり、自分が自分を捉える表現として「自分らしさ」があると述べている。それゆえ、「その人らしさ」という表現は、他者が対象者を捉えることから、他者の推測が大きく影響することがあり、抽象的で主観的になりやすいと述べている。

文献検討において、高齢者施設の看護師は、認知症高齢者の「その人らしさ」を「生活者としての認知症高齢者のありのままの姿」「ケアを通して現れる認知症高齢

者の姿」「施設という環境で暮らす認知症高齢者の姿」「人生の中で培われてきた認知症高齢者の姿」から捉えていた。

これらは、認知症をもつ人を一人の「人」として尊重し、「生活者としての認知症高齢者のありのままの姿」として受け入れ、日常ケアにおいてはその人の立場に立ち、「ケアを通して現れる認知症高齢者の姿」を支え、目の前の認知症高齢者の姿だけではなく、「施設という環境で暮らす認知症高齢者の姿」をもとに「人生の中で培われてきた認知症高齢者の姿」に繋げて「その人らしさ」を捉えていたと考えられる。

このような認知症ケアについて、トム・キットウッドは、パーソン・センタード・ケアとして提唱している。そして、ドーン・ブルッカー(2010)は、認知症をもつ人たちのパーソンフッドを「一人の人として、周囲に受け入れられ、尊重されること、一人の人として、周囲の人や社会との関りをもち受け入れられ、尊重され、それを実感している、その人のありさまを示す。人として、相手の気持ちを大事にし、尊敬しあうこと。互い思いやり、寄り添い、信頼しあう、相互関係を含む概念である」と定義している。

本研究で明らかになった、高齢者施設の看護師が捉える認知症高齢者のその人らしさは、現在の認知症の症状に現れる人となりから、認知症高齢者のありのままの姿、ケアを通して現れる姿、施設という環境で過ごす姿、長い人生の中で培われてきた姿も踏まえて、「その人らしさ」を捉えていることが推察できる。これらは、認知症

表3 認知症高齢者のその人らしさを大切にケア

分類	認知症高齢者のその人らしさを大切にケア内容(文献番号)
安心できる環境の調整	<ul style="list-style-type: none"> 相手の状況に合わせた対応(①) 安心できる関係を構築(①) 不安な思いに寄り添う(③) 自分の居場所として認識し、落ち着いて過ごせる居心地の良い環境調整(②, ⑥) パーソナルスペースを大事にする(⑥)
自尊心を尊重したケア	<ul style="list-style-type: none"> 言動の理由や意図を探り、自尊心を傷つけないアプローチ(①) 言動を否定することなく、相手の身になって思いや言動を受け止める(③) 納得できるかわり(③) 認知症高齢者を生活者と捉える(④) 個人の歴史を理解し、他者からの視点で捉えたものをその人らしさと認識している(④)
残存能力を引き出すケア	<ul style="list-style-type: none"> 様々な刺激を与え内面を引き出す(⑥) できることを発見し継続していく(⑥) できる機能を発揮する機会をつくる(③) 看護ケアを通して、対象の言動の意味や固有の認知症の世界を理解し、ニーズに合うケアに発展(②)
からだを整えるケア	<ul style="list-style-type: none"> 身体症状の把握と対応(⑥) 認知症という疾患の特徴や加齢による変化を踏まえる(①) 言動を常に心身の健康状態と関連させ、体調変化の兆しを早期に察知する(①) 生活を支援するための医学的視点を持ち、体的側面を援助する(⑤)

高齢者を脳の障害だけではなく、身体的健康や個人の生活歴、性格、その人を取り巻く社会的環境などから捉えていくという点で、パーソン・センタード・ケアの考え方や一致し、認知症高齢者のパーソンフッドを維持していると言える。

今後、高齢者施設を新たな暮らしの場とする認知症高齢者に、一人の人として周囲に受け入れられ、尊重されるケアがおこなわれるためには、認知症高齢者の「自分らしさ」と他者である看護師が捉える認知症高齢者の「その人らしさ」が、できる限り一致していることが望ましい。

以上のことから、高齢者施設の看護師が、「生活者としての認知症高齢者のありのままの姿」「ケアを通して現れる認知症高齢者の姿」「施設という環境で暮らす認知症高齢者の姿」「人生の中で培われてきた認知症高齢者の姿」から、認知症高齢者のその人らしさを捉えることが重要である。このことは、認知症高齢者が施設でその人らしい生活を継続することにつながる。

2. 認知症高齢者のその人らしさを大切にされたケアの特徴

本研究において、認知症高齢者の「その人らしさ」を大切にされたケアの特徴として、「安心できる環境の調整」「自尊心を尊重したケア」「残存能力を引き出すケア」「からだを整えるケア」が明らかとなった。

令和3年版高齢者白書によると、介護施設等の定員数は増加傾向にある。このことより、今後も高齢者が、住み慣れた自宅からリロケーションする機会は多くなると予測される。

渡辺ら(2014)は、リロケーションを「生活・空間の変化、对人的環境の変化、自己の変化を伴うものであり、混乱に遭遇しつつ、安定した生活を獲得するために対処や立て直し行うこと」と定義している。しかし、認知症高齢者の場合、認知機能低下や日常生活動作の低下により自ら、この定義に含まれる「安定した生活を獲得するために対処や立て直し行うこと」は、困難になることが多い。鈴木ら(2020)も自分を脅かす不快を言葉として表現することが難しくなる認知症高齢者の生活における安心は、支援を得ることで獲得でき、自律性や日常生活を取り戻すことが可能になると指摘している。

このようなケアとして、高齢者施設の看護師がおこなう、認知症高齢者が施設を自分の居場所として認識し、落ち着いて過ごせるように、パーソナルスペースの確保や居心地の良い、「安心できる環境の調整」は非常に重

要である。

また、高齢者施設の看護師が、認知症高齢者を生活者と捉え、生活の中での言動を否定することなく、ありのままの姿を大切に、「自尊心を尊重したケア」をおこなうことは、物理的環境の調整だけではなく、看護師自身が、生物的環境として、認知症高齢者の環境の一部であるということを意識することが大切である。

認知症高齢者には、人生の中で培ってきた「できる力」がある。しかし、認知症という病態や加齢変化により、「行動をしない」「できない」ことに焦点が当てられ、過小評価されがちである。そのため、認知症高齢者の低下した機能を補うケアが中心となる。このような状況の中でも、看護師が認知症高齢者のできる力に焦点を当てることは、認知症を有していても生活機能を再獲得する機会につながる。

Kolcaba(2013)は、コンフォートについて緩和、安心、超越に達するニードが経験の4つのコンテクト(身体的、サイコスピリットの、社会的、環境的)において、満たされることにより、自分が強められているという即時的な経験であると定義している。特にサイコスピリットのコンフォートとは、自己の心理的、情緒的、霊的要素を結びつけたものである。そして、何よりも個人の人生に意味を与えるものであり、自尊心、自己概念、セクシュアリティ等を包含している(Kolcaba, 2013)。このことから、認知症高齢者のできる力に焦点を当てる「残存能力を探し引き出すケア」は、認知症高齢者個人の人生に意味を与え、自尊心を大切にケアとなる。このことは、認知症高齢者の自尊感情を高めることにもつながる。

最後に、認知症高齢者はリロケーションだけではなく、身体的状態の変化から興奮症状や精神症状を生じやすくなる。なぜなら、認知症高齢者は、生じている問題を本人のセルフケアによって解決することは困難である場合が多く、食事、排泄、睡眠といった生理的ニーズが十分満たされないことや、痛みや体調不良に由来することも多いからである(長畑ら, 2008)。このような状況は、本来の認知症高齢者のその人らしさを隠してしまい、ケアの困難さだけが取り上げられることにつながる。そのため、高齢者施設の看護師は、医学的視点を持ち、認知症という疾患の特徴や加齢による変化と言動を常に心身の健康状態と関連させてケアをしていることが推察される。そして、認知症高齢者の体調変化の兆しを早期に察知し、「からだを整えるケア」をしていた。

以上のことから、認知症高齢者が、その人らしくコン

フォートな状態を保ちながら、施設で暮らし続けるためには、高齢者施設の看護師がおこなう「安心できる環境の調整」「自尊心を尊重したケア」「残存能力を引き出すケア」「からだを整えるケア」が重要である。

今後の課題として、高齢者施設において認知症高齢者の疾患管理とその人らしい暮らしを支える医療と介護の質の向上には、施設入所早期から高齢者施設の看護師が、認知症高齢者のその人らしさを大切にケアを意図的におこなうことが重要であると言える。

VII. まとめ

高齢者施設で働く看護師が、認知症高齢者のその人らしさをどのように捉えているかと、そこで行われているケアについて文献レビューを行った。

高齢者施設の看護師は、認知症高齢者のその人らしさを「生活者としての認知症高齢者のありのままの姿」「ケアを通して現れる認知症高齢者の姿」「施設という環境で暮らす認知症高齢者の姿」「人生の中で培われてきた認知症高齢者の姿」から捉えていることが推察できた。そして、高齢者施設の看護師は、医学的視点を持ち、認知症という疾患の特徴や加齢による変化と認知症高齢者の言動を常に心身の健康状態と関連させながら、ケアをしていることが推察できた。

VIII. 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

【文献】

- 青柳暁子他 (2017). 看護職・介護職が認識する認知症高齢者のその人らしさ. 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 12 巻, p11-18.
- 秋本千佳他 (2019). 介護老人福祉施設の高齢者が感じる「自分らしさ」とケア職員が捉える「その人らしさ」. 日本看護医療学会雑誌, 21 巻, 1 号, p49-58.
- ドーン・ブルッカー著, 水野裕監修 (2010). 『VIPS ですすめる パーソン・センタード・ケア』. クリエイツかもがわ.
- 福田耕嗣他 (2013). 「BPSD 初期対応ガイドライン」と期待される効果. Geriat. Med. 51 巻, 1 号, pp27-30.
- 伊藤正哉 小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討. 教育心理学研究, 53 巻, p74-85.
- キャサリン・コルカバ著, 太田喜久子監訳 (2008). コルカバ コンフォート理論 理論の開発過程と実践への適用. 東京: 医学書院
- 久米真代他 (2010). 認知症高齢者の入所後の適応プロセス—居室開放型施設での適応行動の観察から—. 神戸市看護大学紀要, 14 巻, p11-20.
- 黒田寿美恵他 (2017). 看護分野におけるその人らしさの概念分析—Rodgers の概念分析法を用いて—. 日本看護研究学会雑誌, 40 巻, 2 号, p141-150.
- 厚生労働省. 「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」(新オレンジプラン), 2015.
- 小松美砂他 (2013). 認知症高齢者の施設へのリロケーション適応に関連する要因と早期介入. 日本認知症ケア学会誌, 12 巻, 2 号, p504-509.
- 松尾憲一 (2006). 〈自分らしさ〉の探求としてのアイデンティティ: ポール・リクルールのアイデンティティ論. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 45 巻, p31-39.
- 長畑多代他 (2008). 介護保険施設において熟練看護師が実践している認知症高齢者への看護ケアプロセスの特徴. 神戸大学大学院保健学研究科紀要, 24 巻, p1-15.
- 長岡さとみ他 (2013). 介護老人保健施設における看護師の認知症高齢者ケア場面のとらえ方とケア行動の特徴. 老年看護学, 17 巻, 2 号, p47-57.
- 内閣府: 健康・福祉, 令和 3 年版高齢社会白書, 2021.
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2020/html/zenbun/s1_2_2.html (2021.10.1)
- 中川 孝子他 (2017). 「その人らしさを尊重したケア」に関する文献検討認知症高齢者への実践に向けて. 青森中央学院大学研究紀要, 27 巻, p141-151.
- 二宮利治他. 日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究, 厚生労働科学研究成果データベース, 2014.
- 小和田美由紀他 (2012). 医療者が捉えるその人らしさに関する研究内容の分析. 群馬保健学紀要, 32 巻, p43-50.
- 鈴木千枝他 (2020). 認知症の人にとっての生活における安心の概念分析. 日本在宅ケア学会誌, 23 巻, 2 号, p73-79.
- 鈴木みずえ他 (2017). 介護保険施設に入所する認知症高齢者の BPSD に及ぼす生活の質 (QOL) の影響. 日本老年医学会雑誌, 54 巻, 3 号, p392-402.
- 田道智治他 (2011). 認知症患者のその人らしさを支える看護実践の構造—医療場面に焦点を当てて—. 老年看護学, 15 巻, 2 号, p44-50.
- 吉元梨恵他 (2019). BPSD のある認知症高齢者の「心地よさ」に働きかける看護職の支援の特徴. ホスピスケアと在宅ケア, 27 巻, 1 号, p2-10.